

A-17 難治性てんかんにおけるクロラゼパム二カリウムの有用性について

東京女子医科大学 医学部 小児科

林北見 小国弘量 大澤真木子

＜目的＞ 通常の抗てんかん薬(クロラゼパムを含む)によって発作が十分に抑制できなかった難治性てんかん67症例に対して、クロラゼパム二カリウムを追加処方し、その有用性を検討した。事前に薬剤の特性、副作用について保護者に説明し了承を得た。＜対象＞ 処方時年齢は5ヶ月から31歳5ヶ月。てんかん発症原因として、脳炎後遺症6例、変性疾患5例、結節性硬化症3例、皮質形成異常3例、周産期低酸素性脳症3例、頭蓋内出血1例、染色体異常1例を認めたが他の45例は原因不明であった。知能は正常14例、軽度遅滞10例、中等度19例、重度23例であった。てんかん類型は、潜因性局在関連てんかん5例、症候性局在関連てんかん27例、症候性全般てんかん25例、乳児重症ミオクロニーてんかん9例、その他の未決定てんかん1例であった。＜結果＞ 1日量9mgから75mg(32.4±15.2)、体重あたり0.2mgから3.2mg(1.0±0.7)を処方し、血中濃度は215μg/mlから8454μg/ml(1904.0±1660.4)であった。発作頻度が75%以下に減少した著効例が6例、50%以下に減少した有効例が13例であり、発作増悪が2例に認められた。有効であった症例でも経時的に効果が低下することが見られた。有効以上19例と無効例とを比較して治療時年齢、血中濃度は一定の傾向を示さなかった。てんかん類型では症候性局在関連てんかんに著効例の多い傾向がみられたが、有効以上では明らかな差を認めなかった。副作用として、高用量で著効した1例に精神症状が認められたが、減量によって軽減した。その他に眠気、興奮など25症例で認められた。＜結論＞ クロラゼパム二カリウムは治療抵抗性の難治性てんかん症例に対しての選択肢になりうると考えられた。

A-18 West 症候群におけるビタミン B6 大量療法の有効性と副作用の検討

大阪府立母子保健総合医療センター 小児神経科

鳥邊泰久 植田仁 鈴木保宏

【目的】日本では West 症候群の初期治療として、ビタミン B₆ 大量療法は抗てんかん薬治療あるいは ACTH 療法前に多くの施設で試みられている。我々の施設でも原則としてビタミン B₆ 大量療法を West 症候群の第1選択として使用してきた。今回当科での West 症候群におけるビタミン B₆ 大量療法の有効性と副作用について検討してみた。

【対象】1990年5月から2000年4月まで当科で West 症候群と診断しビタミン B₆ 大量療法(20mg/kg/日以上を最低5日間投与)を施行した50例(潜因性5例、症候性45例)を対象とした。

【結果】ビタミン B₆ 大量療法は平均1.4番目に選択されていた。治療効果は著効(発作消失)が6例(12%)、有効(50%以上発作消失したもの)6例(12%)、無効が38例(76%)であった。著効例は全例症候性 West 症候群であり、3例で平均3.7カ月(1~9カ月)後に再発した。副作用は全症例の42%にみられ、嘔吐のみ12例、下痢のみ2例、肝機能障害のみ1例、嘔吐と下痢を認めたもの3例、嘔吐と肝機能障害を認めたもの3例であった。嘔吐および肝機能障害は40mg/kg/日以上投与で出現しやすく、下痢は20~30mg/kg/日の投与量でもみられた。嘔吐、下痢の出現までの期間は投与開始直後から3日以内が多く、肝機能障害は平均投与1週間目で判明した。いずれの副作用も投与中止により速やかに改善した。

【結論】ビタミン B₆ 大量療法は、報告されている抗てんかん薬の有効性と比較し治療効果が低く、また副作用の発現が多いと考えられた。

A